

[A年]復活節第5主日(2021年4月28日)**【旧約聖書日課】サムエル記下1章17～27節**

17ダビデはサウルとその子ヨナタンを悼む歌を詠み、¹⁸「弓」と題して、ユダの人々に教えるように命じた。この詩は『ヤシャルの書』に収められている。

19 イスラエルよ、「麗しき者」は
お前の高い丘の上で刺し殺された。
ああ、勇士らは倒れた。

20 ガトに告げるな
アシュケロンの街々にこれを知らせるな
ベリシテの娘らが喜び祝い
割礼なき者の娘らが喜び勇むことのないように。

21 ギルボアの山々よ、いけにえを求めた野よ
お前たちの上には露も結ぶな、雨も降るな。
勇士らの盾がそこに見捨てられ
サウルの盾が油も塗られずに見捨てられている。

22 刺し殺した者たちの血
勇士らの脂をなめずには
ヨナタンの弓は決して退かず
サウルの剣が
むなしく納められることもなかった。

23 サウルとヨナタン、愛され喜ばれた二人
驚よりも速く、獅子よりも雄々しかった。
命ある時も死に臨んでも
二人が離れることはなかった。

24 泣け、イスラエルの娘らよ、サウルのために。
紅の衣をお前たちに着せ
お前たちの衣の上に
金の飾りをおいたサウルのために。

25 ああ、勇士らは戦いのさなかに倒れた。
ヨナタンはイスラエルの高い丘で刺し殺された。

26 あなたを思ってわたしは悲しむ
兄弟ヨナタンよ、まことの喜び
女の愛にまさる驚くべきあなたの愛を。

27 ああ、勇士らは倒れた。
戦いの器は失われた。

【使徒書日課】ヨハネの手紙一2章1～11節

¹わたしの子たちよ、これらのことを書くのは、あなたがたが罪を犯さないようになるためです。たとえ罪を犯しても、御父のもとに弁護者、正しい方、イエス・キリストがおられます。²この方こそ、わたしたちの罪、いや、わたしたちの罪ばかりでなく、全世界の罪を償ういけにえです。³わたしたちは、神の掟を守るなら、それによって、神を知っていることが分かります。⁴「神を知っている」と言いながら、神の掟を守らない者は、偽り者で、その人の内には真理はありません。⁵しかし、

神の言葉を守るなら、まことにその人の内には神の愛が実現しています。これによって、わたしたちが神の内にいることが分かります。⁶神の内にもいつもいると言う人は、イエスが歩まれたように自らも歩まなければなりません。

⁷愛する者たち、わたしがあなたがたに書いているのは、新しい掟ではなく、あなたがたが初めから受けていた古い掟です。この古い掟とは、あなたがたが既に聞いたことのある言葉です。⁸しかし、わたしは新しい掟として書いています。そのことは、イエスにとってもあなたがたにとっても真実です。闇が去って、既にまことの光が輝いているからです。⁹「光の中にいる」と言いながら、兄弟を憎む者は、今もお闇の中にいます。¹⁰兄弟を愛する人は、いつも光の中におり、その人にはつまずきがありません。¹¹しかし、兄弟を憎む者は闇の中におり、闇の中を歩み、自分がどこへ行くかを知りません。闇がこの人の目を見えなくしたからです。

【福音書日課】ヨハネによる福音書14章1～11節

¹「心を騒がせるな。神を信じなさい。そして、わたしをも信じなさい。²わたしの父の家には住む所がたくさんある。もしなければ、あなたがたのために場所を用意しに行くと言ったであろうか。³行ってあなたがたのために場所を用意したら、戻って来て、あなたがたをわたしのもとに迎える。こうして、わたしのいる所に、あなたがたもいることになる。⁴わたしがどこへ行くのか、その道をあなたがたは知っている。⁵トマスが言った。「主よ、どこへ行かれるのか、わたしたちには分かりません。どうして、その道を知ることができるのでしょうか。」⁶イエスは言われた。「わたしは道であり、真理であり、命である。わたしを通らなければ、だれも父のもとに行くことができない。⁷あなたがたがわたしを知っているなら、わたしの父をも知るようになる。今から、あなたがたは父を知る。いや、既に父を見ている。」⁸フィリポが「主よ、わたしたちに御父をお示してください。そうすれば満足できます」と言うと、⁹イエスは言われた。「フィリポ、こんなに長い間一緒にいるのに、わたしが分かっているのか。わたしを見た者は、父を見たのだ。なぜ、『わたしたちに御父をお示してください』と言うのか。¹⁰わたしが父の内におり、父がわたしの内におられることを、信じないのか。わたしがあなたがたに言う言葉は、自分から話しているのではない。わたしの内におられる父が、その業を行っておられるのである。¹¹わたしが父の内におり、父がわたしの内におられると、わたしが言うのを信じなさい。もしそれを信じないなら、業そのものによって信じなさい。」

「聖書協会共同訳」(2018年版) 読み比べ

サムエル記下1章17～27節

17ダビデは、サウルとその子ヨナタンのために次のような哀歌を詠み、18「弓」と題して、ユダの人々に教えるよう命じた。これは『ヤシャルの書』に記されている。

- 19 イスラエルよ、かの麗しき者は
お前の高い丘の上で刺し殺された。
ああ、勇士らは倒れてしまった。
- 20 ガトに知らせるな。
アシュケロン一帯で公にするな。
さもないと、ペリシテ人の娘たちが喜び
割礼なき者の娘たちが勝ち誇るかもしれない。
- 21 ギルボアの山々よ、いけにえに飢えた大地よ
お前たちの上には露も降りるな、雨も降るな。
そこには勇士らの盾とサウルの盾が
油も塗られずに打ち捨てられている。
- 22 刺し殺された者たちの血を吸うことなく
勇士らの脂をなめずには
ヨナタンの弓は元に戻ることはなく
サウルの剣が空しく納められることもなかった。
- 23 サウルとヨナタン、愛され喜ばれた二人
命ある時も、死に臨んでも離れることはなく
鷲よりも速く、獅子よりも強かった。
- 24 イスラエルの娘たちよ、サウルのために泣け。
お前たちに贅沢な深紅の衣をまとわせ
その衣の上に金の飾りを施してくれた。
- 25 ああ、勇士らは戦いのさなかに倒れた。
ヨナタンはあの高い丘の上で刺し殺された。
- 26 あなたを思って私は悲しむ。
兄弟ヨナタンよ、あなたはまことに私の喜び。
あなたの愛は女の愛にまさってすばらしかった。
- 27 ああ、勇士らは倒れた。
戦いの器はうせてしまった。

ヨハネの手紙一2章1～11節

1私の子たちよ、これらのことを書くのは、あなたがたが罪を犯さないようになるためです。たとえ罪を犯しても、私たちには御父のもとに弁護者、正しい方、イエス・キリストがおられます。2この方こそ、私たちの罪、いや、私たちの罪だけではなく、全世界の罪のための宥めの献げ物〔別訳→罪を償ういけにえ〕です。3私たちは、神の戒めを守るなら、それによって、神を知っていることが分かります。4「神を知っている」と言いながら、その戒めを守らない者は、偽り者であり、その人の内に真理はありません。5しかし、神の言葉を守るなら、その人の内に神の愛が真に全うされてい

ます。これによって、私たちが神の内にいることが分かります。6神の内にとどまっていると言う人は、イエスが歩まれたように自らも歩まなければなりません。

7愛する人たち、私があなたがたに書き送るのは、新しい戒めではなく、あなたがたが初めから受けていた古い戒めです。その古い戒めとは、あなたがたがかつて聞いた言葉です。8しかし、私は、あなたがたにこれを新しい戒めとしてもう一度書き送ります。それは、イエスにとっても、あなたがたにとっても真実です。闇が過ぎ去り、すでにまことの光が輝いているからです。9光の中にいると言いながら、きょうだいを憎む者は、今なお闇の中にいます。10きょうだいを愛する者は、光の中にとどまり、その人にはつまずきがありません。11しかし、きょうだいを憎む者は闇の中にいて、闇の中を歩み、自分がどこへ行くかを知りません。闇がその人の目を見えなくしたからです。

ヨハネによる福音書14章1～11節

1「心を騒がせてはならない。神を信じ、また私を信じなさい。2私の父の家には住まいがたくさんある。もしなければ、私はそう言っておいたであらう。あなたがたのために場所を用意に行くのだ。3行ってあなたがたのために場所を用意したら、戻って来て、あなたがたを私のもとに迎える。こうして、私のいる所に、あなたがたもいることになる。4私がどこへ行くのか、その道をあなたがたは知っている。」5トマスが言った。「主よ、どこへ行かれるのか、私たちには分かりません。どうして、その道が分かるでしょう。」6イエスは言われた。「私は道であり、真理であり、命である。私を通らなければ、誰も父のもとに行くことができない。7あなたがたが私を知っているなら、私の父をも知るであらう。いや、今、あなたがたは父を知っており、また、すでに父を見たのだ。」8フィリポが、「主よ、私たちに御父をお示してください。そうすれば満足します」と言うと、9イエスは言われた。「フィリポ、こんなに長い間一緒にいるのに、私が分かっているのか。私を見た者は、父を見たのだ。なぜ、『私たちに御父をお示してください』と言うのか。10私が父の内におり、父が私の内におられることを、信じないのか。私があなたがたに言う言葉は、勝手に〔直訳→自分から〕話しているのではない。父が私の内におり〔直訳→とどまり〕その業を行っておられるのである。11私が父の内におり〔直訳→とどまり〕、父が私の内におられると、私が言うのを信じなさい。もしそれを信じないなら、業そのものによって信じなさい。

黙想のためのノート**次主日聖書日課について**

・5月2日「復活節第5主日」の日課主題は「父への道」。「復活節」の後半は、復活者であるキリストが神と人との間を取り持つ仲保者であることを教える聖書箇所が取り上げられ、「昇天」の出来事として物語られる事柄の意味を指し示していくことになる。

旧約日課(サムエル下1章より)

・「サムエル記」は、元来上下巻で一書の文書として作成されているが、便宜上、上下巻に分けて扱われてきた。ユダヤ正典中「前の預言者」の第三部として置かれ、「イスラエルの王国成立史」を構成している。「前の預言者」第二部の「士師記」の描く時代状況からイスラエル諸部族を束ねる王権がサウル王即位によって成立し、続くダビデ王によって大イスラエル連合王国が完成したと描かれる。「前の預言者」第四部の「列王記」とも年代記的に接続されており、「前の預言者」全体が統一的な編纂過程の中で最終形態に至ったことが明らかであるが、同じ「王国時代」を描く「サムエル記」と「列王記」には、物語る手法に大きな相違がある。「サムエル記」が、預言者サムエル、初代王サウル、次王ダビデらに関する民間英雄伝承的な叙述に徹しているのに対して、「列王記」は、王宮文化の中で作成・保存されてきた「王の歴代誌」や「預言者の預言の書」など多くの公式文書が資料として用いられ、文体や構成を支配している。おそらく、サウル王の時代やダビデ王の時代は、公式文書を逐次作成するような王宮は確立されておらず、もっぱら口伝資料を収集することで「サムエル記」が編集されたということなのだろう。実際、後に大量に作成されるようになった「ヘブライ語」文書の「ヘブライ文字」は、「フェニキア文字」を流用したものであるが、フェニキア人(自称「カナン人」)との交流は、ダビデ王の時代に徐々に始まり、ソロモン王の時代になって隆盛を極めるようになったことが「列王記」の記述などから明らかである。

・日課箇所は、イスラエルの初代王サウルが、息子ヨナタンと共に対ペリシテ戦争に敗れ戦死したことを、ダビデが嘆き、挽歌をささげたとして記されている。ダビデは、少年時代にサウルの王宮に豎琴の名手として召し入れられたとされており(サム上16章)、その後、軍人として台頭したためにサウルの前から排除されることになりながら、主君に対する忠誠と主君の息子ヨナタンに対する友情を保ち続け、その死を悼んだ、という。これら一連の物語は、「英雄伝承」として誇張や美徳譚の傾向があるにしても、そうであればこそ、理想の王とされた「ダビデ」に求められたものの多くが組み込まれているものとして受けとめることができる。

・「弓(ケシエト)」は、「ノア物語」(創世記9章)に出てくる「虹」と同じ語。武器としての意味と共に、「ノアへの約束のしるし」である「虹」を想起させるもの。

・「ヤシャルの書」は、「ヨシュア記」10:13でも引用されているように、戦いに関連するさまざまな詩歌が収められていたと想像される文書で、おそらく王宮文化の中で継承され、正典編纂時に資料として用いられた。

使徒書日課(Ⅰヨハネ2章より)

・「ヨハネの手紙一」は、「ヨハネ福音書」「手紙二」「手紙三」と共に、一連の「ヨハネ文書」の一つとして位置づけられる。これらに著者としての「ヨハネ」の名は見られないが、福音書において十二弟子の一人でゼベダイの子ヤコブと兄弟であったヨハネと思われる弟子が特別な扱いで描かれていること、一連の文書が同じ問題意識をもって神学的思惟を展開していること、実際に「使徒ヨハネの伝承」として教会で伝承されてきたことの中にこれら一連の文書が置かれてきたことなどから、「ヨハネ文書」として扱われてきた。一連の「ヨハネ文書」の成立過程は、「ヨハネ福音書」が二段階の編集を経て完成した蓋然性が高いことを踏まえて推認されている。すなわち、まず、ヨハネの教会共同体で起こった神学論争による対立において、一方が他方を断罪するような原「ヨハネ福音書」が作成されるが、それによって疑心暗鬼となり分裂や敵対が深まった共同体に「愛の掟」の原点に立ち返らせることを目的に「手紙一」が作成され、それを踏まえて、対立を超えた「一致」こそがキリストの目的であることを明確にするように修正された改訂「ヨハネ福音書」が作成された、と考えられている。

・日課箇所は、対立を続ける共同体内の人々に対して、それがキリストの「掟」の原則に反することを、強い口調で教えている。その前提として、キリストによる罪の赦しの原理を確認し、「赦された者」として「互いに愛し合う」掟に立つべきことを示そうとしている。

福音書日課(ヨハネ14章より)

・「ヨハネ福音書」の13～16章は、主イエスが十字架につけられる前の晩に弟子たちと最後の晩餐を取られた際になされた対話や教えが集中的に配置されている。おそらく、13～14章が洗足や食事の行われた「家」を場面として想定しているのに対して、15～16章は、「家」から出かけて「ゲッセマネの園」に向かう道中を想定している。17章は「祈り」であり、「ヨハネ福音書」は、これを「ゲッセマネの祈り」と見ている。

・日課箇所は1節「心を騒がせるな」から始まるが、この言葉は、おそらく12:27「今、わたしは心騒ぐ」に対応するものとして置かれている。12:27以下は、「ヨハネ福音書」では例外的に主イエスが動揺を示し、神の御心との間に葛藤を訴える場面である。この12:27以下は、「マタイ福音書」11:25以下と同じ伝承に基づくものと推察される箇所でも、必ずしも「ヨハネ福音書」のキリスト論(地上の活動において、すでに天父との間に御言葉と御業を含めたすべてにおいて一致されている)に沿っていないものとも考えられる。「ヨハネ福

音書」は、この 12:27 以下を置くことによって、14:1 で指摘する「心を騒がせる」弟子たちの、「心騒ぐ」状態から「心騒がせない」状態へどのように移行することができるのかを示そうとしているのかもしれない。

・2 節「もしなければ、あなたがたのために場所を用意しに行くと言ったであろうか」は、別訳「もしなければ、私はそう言うておいたであろう。あなたがたのために場所を用意しに行くのだ」(聖書協会共同訳)も可能。
 ・8 節に登場する「フィリポ」は、共観福音書では十二弟子のリストに挙げられる他はほとんど取り上げられない人物であるが、「ヨハネ福音書」では、繰り返し登場させられている(1 章=弟子の召しの場面、6 章=五千人の給食の場面、12 章=ギリシア人を主イエスに紹介する場面)。西方教会では、フィリポの記念日を 5 月に設定してきた(現在は 5 月 1 日または 3 日)。

来週の誕生日 (5 月 2 日~8 日)

主日礼拝の讃美歌から

- ・21-207 番「ほめよ主を」は、1960~70 年代の礼拝改革運動の流れの中で英国教会司祭バワーズが作詞。曲は、20 世紀米国の代表的な教会音楽家 R.W. ダークセンの作曲。
- ・21-171 番「かみさまのあいは」(= 40 番)は、カトリック司祭・佐久間彪が作詞した創作詩編歌(148 編)で、1980 年版『典礼聖歌』に所収後、1987 年版『こどもさんびか2』に採用された。ローマ・カトリック教会は 1960 年代に開催した第 2 ヴァチカン公会議の結果、それまでの世界共通ラテン語典礼という原則を大転換し、信徒が完全に母国語でミサにあずかるという原則で典礼改革が行われた。以来、数多くの日本語典礼聖歌が創作され、その中からプロテスタント讃美歌に導入されたものも少なくない。プロテスタントとの共同翻訳である『聖書・新共同訳』も、この典礼改革の一環で行われたもの。佐久間司祭は、日本でこの典礼改革を担った委員の一人。
- ・21-528 番「あなたの道を」(= 1280 番)は、17 世紀ドイツを代表する讃美歌作家パウル・ゲアハルトが詩編 37:5 から着想して作詞した 12 節の讃美歌詞に、18 世紀ドイツの作曲家 J.M. ハイダンの曲が組み合わせられているが、現行のドイツ語讃美歌では別の曲と組み合わせられている。ジョン・ウェスレーの英訳詞(Give to the Winds Thy fears)によって、英語讃美歌集でも歌い継がれている。

21-207 「ほめよ主を」

We the Lord's People

1. We the Lord's people, / heart and voice uniting, / praise him who called us out of sin and darkness / into his own light, that he might anoint us / a royal priesthood.
2. This is the Lord's house, / home of all his people, / school for the faithful, / refuge for the sinner, / rest for the pilgrim, haven for the weary; / all find a welcome.

3. This is the Lord's day, / day of God's own making, / day of creation, day of resurrection, / day of the Spirit, sign of heaven's banquet, / day for rejoicing.
4. In the Lord's service / bread and wine are offered, / that Christ may take them, / bless them, break and give them / to all his people, his own life imparting, / food everlasting.

21-528 「あなたの道を」

Befiehl du deine Wege

- 1 BEFIEHL du deine Wege / und was dein Herze kränkt / der allertreusten Pflege / des, der den Himmel lenkt. / Der Wolken Luft und Winden / gibt Wege, Lauf und Bahn / der wird auch Wege finden, / da dein Fuß gehen kann.
- 2 DEM HERREN musst du trauen, / wenn dir's soll wohlergehn; / auf sein Werk musst du schauen, / wenn dein Werk soll bestehn. / Mit Sorgen und mit Grämen und mit selbsteigner Pein / lässt Gott sich gar nichts nehmen: / es muss erbeten sein.
- 3 DEIN ewge Treu und Gnade, / o Vater, weiß und sieht, / was gut sei oder schade / dem sterblichen Geblüt; / und was du dann erlesen, / das treibst du, starker Held, / und bringst zum Stand und Wesen, / was deinem Rat gefällt.
- 4 WEG hast du allerwegen, / an Mitteln fehlt dir's nicht; / dein Tun ist lauter Segen, / dein Gang ist lauter Licht. / Dein Werk kann niemand hindern, / dein Arbeit darf nicht ruhn, / wenn du, was deinen Kindern / ersprießlich ist, willst tun.
- 5 UND ob gleich alle Teufel / hier wollten widerstehn, / so wird doch ohne Zweifel / Gott nicht zurücke gehen; / was er sich vorgenommen / und was er haben will, / das muss doch endlich kommen / zu seinem Zweck und Ziel.
- 6 HOFF, o du arme Seele, / hoff und sei unverzagt! / Gott wird dich aus der Höhle, / da dich der Kummer plagt, / mit großen Gnaden rücken; / erwarte nur die Zeit, / so wirst du schon erblicken / die Sonn der schönsten Freud.
- 7 AUF, auf, gib deinem Schmerze / und Sorgen Gute Nacht! / Lass fahren, was das Herze / betrübt und traurig macht; / bist du doch nicht Regente, / der alles führen soll: / Gott sitzt im Regimente / und führet alles wohl.
- 8 IHN, ihn lass tun und walten! / Er ist ein weiser Fürst / und wird sich so verhalten, / dass du dich wundern wirst, / wenn er, wie ihm gebühret, / mit wunderbarem Rat / das Werk hinausgeführt, / das dich bekümmert hat.
- 9 ER wird zwar eine Weile / mit seinem Trost verziehn / und tun an seinem Teile, / als hätt in seinem Sinn / er deiner sich begeben / und solltest du für und für / in Angst und Nöten schweben, / als frag er nicht nach dir.
- 10 WIRDS aber sich befinden, / dass du ihm treu verbleibst, / so wird er dich entbinden, / da du's am mindestn gläubst; / er wird dein Herze lösen / von der so schweren Last, / die du zu keinem Bösen / bisher getragen hast.
- 11 WOHL dir, du Kind der Treue! / Du hast und trägst davon / mit Ruhm und Dankgeschreie / den Sieg und Ehrenkron; / Gott gibt dir selbst die Palmen / in deine rechte Hand, / und du singst Freudenpsalmen / dem, der dein Leid gewandt.
- 12 MACH END, o Herr, mach Ende / mit aller unsrer Not; / stärk unsre Füß und Hände / und lass bis in den Tod / und allzeit deiner Pflege / und Treu empfohlen sein, / so gehen unsre Wege / gewiss zum Himmel ein.